

核兵器廃絶は夢物語ではない

ーこれからの私たちの役割ー

新保天海

「被爆者全員が核がこの世界からなくなることを願っている。」
私は、被爆者である祖母のこの想いを引き継いでいく。

広島出身の祖母は当時4歳だったが、今でも鮮明に1945年8月6日の状況を覚えているという。

また、祖母の妹の同級生である佐々木貞子さんが原爆投下から約10年後、原爆症で亡くなったことも聞いた。貞子さん以外にも投下直後だけでなく、何年経っても苦しむ人、亡くなった方がたくさんいる。

核兵器の恐ろしさを幼い頃から聞いていた私は、小学生の頃からアンネ・フランクの伝記を何度も何度も読み直したりと戦争に興味を持つようになり、昔から広島へ訪れてみたいと思っていた。そんな中、高校2年生、オーストラリアに行く予定だった修学旅行が、コロナの影響で広島に行くことが決まった。周りの子たちは悲しんでいたが、私は念願の広島へ行けることが、正直ものすごく嬉しかった。広島へ訪れるまで、YouTubeで被爆者の話を見たり、文献を漁る日々を送った。

そして、修学旅行当日、原爆ドームが見えた時、何故か緊張した。とても楽しみにしていたのに、実際に訪れたら「77年前のこの場所であの悲惨な出来事が起きてしまったんだ。どうして原爆投下を止めることができなかったのか。」と悲しさと憤りを覚えた。

しかし、こんな私の気持ちとは裏腹に同級生の無関心な姿に幻滅した。ボランティアの方の話真剣に聞く同級生、原爆資料館の展示品を見て涙を流す同級生がいる中で、「疲れた、ホテルに戻りたい」と言って椅子に座っている同級生が何十人もいた。

さらに、国際政治の現場でも核廃絶に向けた進歩が見られないように感じる。G7広島サミットでは核軍縮に絞った初めての成果文書が「広島ビジョン」で掲げられた。「広島ビジョン」ではロシアによる核の威嚇および使用は許さないとしつつも、核保有国の核の在り方については核抑止力としての核の役割を再確認した。また、日本政府は唯一の戦争被爆国として核兵器の廃絶を目指しながら、核兵器禁止条約について、核保有国が参加していない禁止条約は現実的な核軍縮にはつながらないとして、条約に反対している。今の国際政治の現場は各国が国益を重視し、核廃絶に向けた対話ができないのではないかと私は強く感じる。

確かに、核兵器があるからこそ実際に起きていない戦争もあるのかもしれない。だが、核抑止力が存在する世界は本当に安全なのだろうか。本当に平和なのだろうか。私は絶対にそう思わない。核保有国が核兵器を使用しないという保証はどこにもない。核兵器が存在する限り、また広島・長崎のような悲惨な出来事が起こりえる。これまで私は広島以外にも沖縄へ行ったり、ウクライナ難民の方から話を聞いてきた。そんな活動の中で私が毎度思うの

は、「核兵器による抑止・武力攻撃というのは地球や人々を守れるわけがない。平和はそんなものでは作れない。」ということだ。

だからこそ私にできることは何なのかということはずっと考えてきた。時には世界が核廃絶に向き合っていない現実には悲しくなり、涙を流したこともある。でも、これまで参加してきた戦争、平和、核に関するイベントでは自分の想いを応援してくれる方々にも出会ってきた。彼らの言葉に奮い立たされ、今の私にできることは祖母からしてもらったように核の恐ろしさを人々に伝え、繋いでいくことだと思ふようになったのだ。その思いから私は、真の国際平和のあり方を追求し続けることを目的に、学生団体Pigeonを立ち上げた。Pigeonで私は、核廃絶に向けて行動している団体や個人の活動、その想いを発信をし、語り継ぐ。これから語り部をはじめとする戦争を体験してきた人たちはどんどん減っていつてしまう。でも、私のこの活動で、修学旅行で無関心だった同級生にも、そしていつか国際政治の現場にも祖母たち被爆者の想いを伝えられるのではないだろうか。このPigeonでの、世界で国際平和を追求し続ける人と対話をし、核廃絶に向き合っていく活動が、きっといつか核廃絶と真の平和構築に繋がっていくと信じている。そして、国家や非国家間の問題を核廃絶や武力攻撃ではなく対話によって、解決する日がいつか来ることを願っている。